

首都圏段戸会会報

第一号（平成二年十月）

発刊にあたつて

会長 稲葉 誠治（中三七回）

このたび、首都圏段戸会の会報を発行することになりました。私どものこの同窓会は、昭和四七年八月に神田の学生会館で第一回が開かれました。勿論そのときは、段戸会などとの冠名はありました。北岡先生（中二十六回）の音頭取りで開催の運びとなつたと思いますが、最初のこととその準備にはさぞ苦労なさつたことと想像いたします。

私もご案内を頃いて出席いたしましたが、記録によりますと出席者は三八名だったそうです。先輩ばかりが多く、同輩が少なく、率直に言つて私には手持ち無汰沙であったと記憶しております。翌年はお休みでしたが、以後参加される方が年ごとに増し、今年で十八回を数えることができました。この間、同窓会本部の会長、校長ゲストの先生方の遠路のご参加、また会員の特別なご支援、幹事諸

首都圏段戸会の皆様に

同窓会長 故部 和男（中四一回）

段戸会会員の皆様には、日頃より「二中・岡中、岡高同窓会」のために、暖かい御協力と励ましを頂き心から御礼申し上げます。

特に九十周年記念事業に際しましては、絶大なお力添えを賜り、誠にありがたく重ねて御礼申し上げます。私は、去る六月開催の総会において、岩瀬前会長の後任として会長の職を拝命いたしました。故部和男でございます。九十有余年に渉る伝統と栄光に輝く、母校の同窓会長の任を受けたて、その責任の重さとともに、身に余る光栄を心に深く刻み、役員一同と共に力を併せて会務に努力いたしますので、御指導御鞭撻の程何卒宜しくお願ひ申しあげます。

首都圏段戸会会員の皆様が、首都圏各地域、各界において御活躍をされておられる模様等を、前会長や歴代校長先生からお聞きして常に心強く思つてゐる次第であります。

創立九十余年の歴史を歩んで来た我が岡崎高校は、自他共に進学校として認められ、九十年の誇りを自負しながら、先生方の御努力のお陰で全国の諸大学へ卒業生を送り出しておりますが、首都圏に在住される同窓先輩の方々より心暖まるお力添えを受けて、同郷同一出身校のありがたさを体験した話など、先輩後輩の絆をしみじみ感謝いたしております。地元在住の私たち同窓会員は、会活動を円滑に回転させ、学校当局とも力を併せて、青雲の志を抱き上京する後輩を送り出すよう、一層の努力をいたしたい所存であります。

段戸会の益々の御発展を祈念すると同時に、同窓会役員一同に対するお導きを重ねてお願い申し上げます。

段戸会会報発刊によせて

学 校 長 日高 武雄（高二回）

このたび、段戸会会報を発刊されることになり、まことにおめでとうございます。関東の岡中・岡高の同窓生の皆様方が一層結束され、ますます会が発展されますよう、御期待いたします。

近年の本校の卒業生は、以前にも増して関東志向が強くなつてしまい、関東または関東以東にも進学を希望する者が増加してきております。何れ段戸会の皆様方には、後輩として何かとお世話になる機会も多かろうと考えます。その折りはよろしく御指導御引き回しの程をお願いいたします。

さて、岡崎高校も学校群最後の三年生が、来春卒業することになりました。それぞれ岡高生として最後の締め括りに向けて、真剣な取組をしてくれていると思つています。今まで良きライバルとして

君のご尽力に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

そして、昭和五十年第三回には喜ばしくかつ歓迎すべきことが起きました。昨年の十七回には、出席総数百四十名の内、女性五五名が出席されました。今では数名の方が幹事として、奥様家業を抜けだしてお手伝いを頂いております。

このように、段戸会は年々盛大になりご同慶に堪えませんが、母校愛に燃える幹事諸君の願いは、もっと大輪にしようということです。出席者の比率が、まだ伸びる可能性十分ありということです。

それには、單に一通のご案内状だけではなく、会報を発行することによって、先ず第一に段戸会のご理解を頂く、ご出席によって母校の現状を知り、同期生との思い出話など、懐かしくも楽しいひとときを過ごして頂くよう、願いを込めて会報の発行に踏み切った次第です。

益々大きな同窓の、そして友情の輪の広がりを願い、発刊のご挨拶といたします。

岡高生にとって、知の上の知恵の働き、将来のための体の鍛錬、耐性や不屈の精神、労働を厭わぬ勤勉性、人間愛に満ちた信頼と好感等々限りはないが、日々の岡高生活の中で、そういうものを目指した取組をしています。

段戸会の皆様方、どうぞ後輩を御奨励下さいますよう、又御健勝でますます御活躍下さいますようお祈り申し上げます。

会員のたより

ふれあい 伊豆原駒吉（中二七回）

「段戸会だより」の発刊と聞いて、素晴らしい企画と敬服した次第である。

段戸会には毎年出席しているが、何か一つ物足りないと感じていたが、それは出席者が少ないということである。首都圏には千数百名の同窓生が居住していると聞くが、出席者は僅か百二、三十名程度にしか過ぎない。「何故こんなに少ないのだろう?」と幹事協議の結果、会だよりを発行して出席者増強に努めよう、ということになつたようである。

特に若い同窓生は、久し振りに恩師にも逢える。恩師も又、懐かしい教え子に逢える喜びを胸に、参加されているのである。心のふれあいとはよく言つたもので、全然知らない者同志でも、同じ学校の卒業ということだけで、心が弾むものである。

社会には数多くの会合があるけれど、やはり青春時代の高校生活

は、生涯忘れ得ぬものと思う。しかも本校は、創立九十年を越える歴史の古い学校であり、進学率も愛知県下で屈指の有名校である、

という誇りを持って、その学校の卒業生という自信をより一層深めるためにも、段戸会に出席してほしい。一度出席すれば、その味が分かるというもの、次回をまた楽しみに期待する心、これもまた楽しからずや。

私程度の年命になると、段戸会の出席が最も待ち望まれる行事になることが、不思議とさえ思えてならない。あ!岡崎、この二文字よ、何處で住んでいても、やはり心の故郷は岡崎だ。故郷を偲び、友人と語る。それも年に一回、これに出席できないようでは、病気か、公務とかを除いて、出席をする気が無いと申しあげては失礼かな?年令に高低の差はある、男女の別はあるとしても、同じ校舎で学んだ者同志語り合えば、必ずや何かが生まれる。それがやがて年をとつてから、楽しみの一つにもなるものと思う。私も年をとつたせいか、こんなことをつくづく思い願う今日この頃なり。

不滅の田舎つべ大会（首都圏同窓会）

小六 英介（高七回）

「同窓生」という人間関係は、集団構成員が同じ出身学校というせまい生活圏で、特殊性のある、共通の体験をしてきたことで発生して、未來永劫不變の間柄である。同窓という集団意識が自然にかもしだされる。

年に一度あるが、同窓会というのは、その集団意識の炎を絶やさないために行われる、直接接觸の場である。

ここでは、他の社会のことを考へることはない。他の世界とのわずらわしい社交を忘れて、同族意識だけで行動すればよい。いわゆるウチの者としての共通の理解の上でのことなのだ。勿論、師弟、先輩後輩の序列は厳然とする。これはわずらわしいのではなく、ユーモラスなのである。まことに日本人らしく、いかにも田舎つべ集会なのである。

交わされる言葉は、三河弁でいい。この社会独特の発想でしゃべ

りまくるのがいい。同族でなければ理解できない話題で埋めつくされれる。だから奇妙な安らぎがあり、温もりがある。甘えのムードも生まれる。こんな場は、首都圏では限られる貴重な場なのだ。

この田舎つべ大会に、特殊な付加価値を持たせようとおもしろくなる。いくわく役にたつこと、勉強になること、短絡的なアトラクション。いずれもうまくいかないものである。趣が違うからなのだ。

何百人も集まつて、何もしないのも芸がないというのだつたら、どうすればいい?

近いようでもなかなか行けない、われらが田舎、岡崎。そこはかとない郷愁をさそい、同郷、同族の喜びと哀しみを分かち会えるもの。山河、歴史、行事、文化、ことば、人のなりわい。徹底的に純朴田舎つべ精神の追求がいい。この時ばかりは田舎つべになりきることが一番だ。有為変転の中に人が生きている以上、田舎つべ大會は不滅なのだから。

ふれあい

高橋美和子（高十回）

「首都圏同窓会に出てみない?」弟に誘われたのは、数年前のことでした。弟は、十二回卒で同期の方々も何名か首都圏に住んで、御活躍なさつているとのことでした。私は、岡崎ではなくと社宅に住んでいました。大学は、東京の薬科大学に進学し、大学二年の時父の定年退職と共に東京へ引っ越しました。両親は、東京で生まれ育ちましたので、岡崎には皆様と違い、親も親戚も居らず、ずっと疎遠になっていました。

岡崎時代の母は、ずっと東京を恋しがっていました。それは、親も兄弟も友達も、皆そこにいる故郷だったからです。ここ東京にはもう親は居ませんが、弟、伯父、伯母、従姉妹達もいて、それぞれ家族が居て、そういう意味では故郷のような気がしていました。初めて、首都圏同窓会に弟と出席したときは、エントランゼのような感じでした。十回生のどなたが、東京に住んでらっしゃるかも知

らず、とても心細かつたです。すぐに安原さんが、声をかけて下さいました。高校時の雰囲気そのまま:すぐに分かりました。彼女だけではありません。パーティーのなかのおじさん、おばさん(失礼)の顔が十代の顔とちゃんと重なるのです。数十年タイムスリップしたみたいに、気分はすっかり高校生。楽しい時間があつという間に過ぎました。校歌も応援歌もちゃんと覚えていたのに、自分でもびっくり!

同窓会のいいところは、学年の違う兄弟や夫婦も一緒に出席できることですね。同級生が近所のお兄さんの奥様だつたりして、人の輪も広がります。十代の時の三年間の重みが、故郷の懐かしい人々との再会で私をあの頃に戻してくれ、母の望郷の気持ちがわかるような気がします。幹事さん方、毎年本当に御苦労様です。楽しい時間をいつも感謝しています。これからも思い出の大切さを、多くの人に教えて下さい。

同窓会あれこれ

深田 弘（中二八回）

私たちは、ある目的のためにフォーマル、インフォーマルの種々なグループを持つていますが、そこでは意見、利害をめぐり対立的なことも生ずることがあり、会合に出席するにしても、不安や覚悟めいたものさえもつことがあります。

ところが同窓会は、グループそのもの、会合そのもの。つまりメンバーに会うことが楽しみであり、悦びであるという、それ自体が目的であるフォーマルなグループであり、その会合は理屈抜きの待ちどうしいものであります。それはかつての身近な中・高の同級関係での横の体験と、それがさらに百年に近い多くの卒業生による、経の歴史的体験のなかに生まれた「共通の心」によって結ばれた、歴史的共同体ともいいうべき世界にほかなりません。

私たちの「自由社会」は、まさに競争の自由による日まぐるしい世の中であり、ここでは立場、地位、役割を問わず、生きるために

神谷 和郎（中四七回）

同窓会とは無縁のまま四十数年間が経過してしまいました。茫茫半世紀前の母校の思い出は、校庭の隅の草つ原に寝そべって、空腹に耐えながら、戦争の行く末をあれこれ空想する以外には、何もありませんでした。

ところが、偶然東京は芝公園にあるメルパルクTOKYO郵便貯金会館の総支配人館長に就任（郵政省の通信博物館長から天下ったのですが）したことから、首都圈段戸会の年次総会の会場をお引き受けする破目に至り、ここ三年間ほど、毎秋吉日をもつて皆様方、在京の同学先輩の各位をお迎えして、四十年間の無音をお詫びするよう、故郷の懐かしい話題に酔いしれている次第です。

多感な青春時代を苦しい戦時の圧政の中で過ごし、今かえつて

丹羽 鼎（高二回）

今年も首都圈段戸会の開催日が迫って来ました。この会は、岡中の大先輩から岡高の後輩の皆さんまで、一堂に会し、旧交を温める素晴らしい集まりである。

私は、高校二年の時に、岡高へ転校したものであるが、このところ殆ど毎年出席しているおかげで、先輩にも後輩にも、親しみを感じられる方ができ、開催の日を待ち遠しく感じている。青春の一時期を、同じ場所で過ごしたという親しさから、先輩とも後輩とも、堅苦しい気分がたちどころにほぐれて行くのも、同窓会ならではの楽しさである。この集まりも、毎年参加者が増加しており、特に最近は女性の出席者が増加して、華やかさを増している

ことも喜ばしいことである。

この楽しい集まりも、毎年稻葉会長を中心とする十数人の世話人が裏方として、日々の忙しい仕事のやりくりをして、数回の準備会を開いて開催にこぎつけている。今年も、昨年にも増して多くの方々のご参集を頂き、楽しい集まりであることを祈りつつ準備に奔走している。

開催通知の発送も、この世話人が中心になつて多忙の中で行っています。しかし、同封した葉書による返信があるのは、私の同期でも六割程度であり、何の連絡もない人がかなりの数に達するのは、残念である。出席できない人もせめて、葉書の返信を送つて下さるよう、切にお願いする次第である。

だいでいるところ、ふるさと岡崎が自然に目に浮かんで来る。そんな首都圈段戸会が、私はとても嬉しい。

編集後記

昨年六月、岡崎で開催された本部の同窓会は、高十二回が幹事であつた。東京からも参加をという地元の幹事、加藤勝司君から声がかかり、喜んで出席をさせてもらつた。

新幹線を豊橋で乗り継ぎ、名鉄電車の特急で二十数年振りに東岡崎駅に向かつたが、途中、本宿あたりの三河の山々は昔のままで、東岡崎駅周辺も学生時代の面影が残つておらず、とても懐かしく思つた。殿橋から見た岡崎城はいつも心に描いていたそのままの姿であつたし、菅生川も贅沢なほど満々と水を湛え、若々しさを誇つていた。

ところで、首都圈段戸会も今年で十八回を数えることとなつた。毎年、遠路地元から恩師にもおいで頂き、先輩や弟や妹のような後輩の皆さんとも、和やかな雰囲気の中で、話し合いをさせていた

自分が他人や組織の道具にされ、自分が自分のものでなくなつてしまいがちであり、レジャーすらが仕事の一部になつてしまつてしまふ。その中にあって、年令、職業、肩書など一切考へることなく、共にお互いが、自分自身そのものになりきることのできるのが、同窓会とその会合であります。

したがつて、この会の年次会は、現代における貴重な自己回復、自己充足の機会であり、いわば最高のレジャーの「場」とも言えます。

岡中・岡高首都圈同窓会は、地域的、役割的にみても、親同窓会の重要な基礎となるはずの組織であります。しかしこれとても組織としての規模は大きく、これの発展のためには、卒業年度単位の糾結によつて、組織を強めて行かなければなりません。

年次会の会場は、まさに校歌にある「岡に集え……」での、「岡」にほかならないと思ひます。

関根 茂（高十二回）

昨年六月、岡崎で開催された本部の同窓会は、高十二回が幹事であつた。東京からも参加をという地元の幹事、加藤勝司君から声がかかり、喜んで出席をさせてもらつた。

新幹線を豊橋で乗り継ぎ、名鉄電車の特急で二十数年振りに東岡崎駅に向かつたが、途中、本宿あたりの三河の山々は昔のままで、東岡崎駅周辺も学生時代の面影が残つておらず、とても懐かしく思つた。殿橋から見た岡崎城はいつも心に描いていたそのままの姿であつたし、菅生川も贅沢なほど満々と水を湛え、若々しさを誇つていた。

ところで、首都圈段戸会も今年で十八回を数えることとなつた。毎年、遠路地元から恩師にもおいで頂き、先輩や弟や妹のような後輩の皆さんとも、和やかな雰囲気の中で、話し合いをさせていた

第十八回 首都圈段戸会総会ご案内

日 時 平成二年十一月十七日(土) 十五時から十七時三十分まで

場 所 東京郵便貯金会館 五階瑞雲の間 電話(四三三三)七二二一

地下鉄 都営三田線芝公園下車 五分 都営浅草線大門下車 八分
J R 浜松町下車 十分

会 費 男 子 八、〇〇〇円

女 子 六、〇〇〇円

なお準備の都合がありますので、ご出欠につき同封のはがきで十一月二日までに返報下さるようお願いいたします。

今年も例年のように校長(日高武雄先生 高二回)・教頭(市川 崇先生 高八回)・同窓会長(畠部和男氏 中四一回)をお迎えするほか、恩師の先生方をお招きし懐かしい話を拝聴したいと思います。

柴 田 元 次 先生

在職期間 昭和十五年四月から一九八九年三月まで

戸 茹 茂 夫 先生(現職 小坂井高校嘱託)

在職期間 昭和三十五年四月から五十五年三月まで

担当科目 地理

担当科目 生物

お願い

昨年皆様に本同窓会の運営基金についてご寄附をお願いしたところ、別紙会計報告のとおり多くの基金が集まりました。これも会員の皆様のご協力のたまものと幹事一同感謝しております。

なお、今後の総会の円滑な運営をはかるため、今年も昨年に引き続き運営基金として「一口壱千円以上」のご寄付を仰ぎたく、なにとぞご協力のほどお願い申し上げます。
払い込みについては、同封の振替用紙か当日受付にご持参頂ければ幸いです。

幹 事

(中
卒)

(高
卒)

51	50	50	50	47	46	45	40	38	37	37	32	32	29	26
中宮	富志	神太	太太	榊深	稻伊	白山	山本	本清	岡健	二郎	北岡	健二	北	中
川島	国賀	谷田	田田	田葉	原川	本川	木田	本清	一郎	一	一	一	一	一
恵駒	重和	修春	誠駒	駒	正山	吉正	山正	正山						
照夫	道学	郎修	平夫	弘治	吉正	正山								
8	7	7	7	6	6	5	5	5	4	3	3	2	1	1
西永	小河	市長	岩馬	平杉	柴	丹木	服村	木村	村祐	登	登	藤禎	紫郎	安藤
村田	六井	川瀬	本淵	野浦	崎嶋	羽登	登	登	登	登	登	三島	三島	三島
直綾	英介	学毅	けい子(高田)	正弘	正健	元弘	元弘	元弘						
人子(左右田)				昭夫	右	右	右	右	右	右	右	木容子(岡部)	木容子(岡部)	木容子(岡部)
13	13	12	12	12	11	11	11	10	10	10	9	9	8	8
杉柴	杉成	関浦	青中	清水	中山	安藤	藤井	井勝	田勝	田勝	田勝	田勝	田勝	田勝
原田	山瀬	根野	木根	根水	根水	崎原	原敦	敦豊	田豊	田豊	田豊	元哲	元哲	元哲
一洋	文也	横吉	横吉	杉尾	杉尾	山安	安藤	藤井	井勝	田勝	田勝	木容子(岡部)	木容子(岡部)	木容子(岡部)
邦彦	豊也	豊也	豊也	水長	水長	太森	太森	太森	太森	太森	太森	美鎮子(都築)	美鎮子(都築)	美鎮子(都築)
				長太	長太	森山	森山	森山	森山	森山	森山	元	元	元
				田田	元	元	元							
				木木	元	元	元							
				根根	元	元	元							
				水水	元	元	元							
				崎崎	元	元	元							
				原原	元	元	元							
				敦敦	元	元	元							
				豊豊	元	元	元							
				圭圭	元	元	元							
				淳淳	元	元	元							
				かゑ子(金部)	元	元	元							
				あや子(斎藤)	元	元	元							
				哲哲	元	元	元							
				子(鳥居)	元	元	元							
				水谷	元	元	元							
				鳥居	元	元	元							
				加藤	元	元	元							
				鏡鏡	元	元	元							
				人鏡	元	元	元							
				正純	元	元	元							
				行宏	元	元	元							
				純	純	純	純	純	純	純	純	元	元	元
				美鎮子(都築)	元	元	元							
				純	純	純	純	純	純	純	純	元	元	元
				元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元

問合せ先

山 内

純(岡崎市東京事務所)電話〇三(五八一)〇三六七

首 都 圈 段 戸 会

会 長 稲 葉 誠 治